

労働者教育の問題点

—「ニューヨーク市立大学に拠点をおく複数の労働者教育センターにおける教育実践から

マシュー・ノイズ

組合民主主義協会 (Association for Union Democracy)・インターネット・フォーティナーナ

翻訳：石川公彦

一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センター

1 はじめに

ないと決心させるのです。」

ユージーン・デブズ (Eugene Debs) の先駆的な組合論と政治組織論を知り、彼の素晴らしい演説を読んでからとつもの、彼は私のヒーローです。デブズは、アメリカ鉄道労働組合 (American Railway Union) の創始者であり、プルマン・ストライキ (Pullman Strike) のリーダーであり、さらに社会党の大統領候補でした。また、闘争的な性格と労働者自身の組織化に尽力していくことで知られていました。

「労働者は、奴隸的境遇から解き放つてくれるモーゼの出現を待ちくたびれています」、デブズが続けて言うには、「しかし、たとえ可能だとしても、私はあなた方、労働者を導いて救つたりはしません。私があなた方を救えたとしても、他の誰かが連れ戻してしまうでしょう。私あなた方に自分たちで出来ないことなど何も

労働者教育の目標、および、教える側と教わる側の役割について、私はつぎの言葉以上のものを知りません。「労働者が自らの手で奴隸的境遇から脱却し、奴隸的境遇に陥らない決心を手助けするために。」

興味深いことに、デブズは労働者教育と労働者組織を解放への鍵と見て、彼の全盛期には從来のものに代わる新しい労働者教育プログラムを支援していたにもかかわらず、「アメリカの大学」が労働運動の建設に役立つのだろうか、と疑問を抱いていました。

(Bronfenbrenner and Hickey, 2003)

しかし、私は、大学の労働者教育プログラムに長年かかわってきた教員の一人として、デブズの視点には説得力があるし、彼の抱いた疑問はもつともなことだと思います。デブズにとって「労働問題を解決する」とは、労働組合と団体行動を通じて労働者の運動を建設することを意味していました。現在の労働者教育や労働研究プログラムは、その目的に本当に貢献しているでしょうか。その目的を達成するべく計画されているのでしょうか。そのような教育は、大学の基盤を急進的に変革することなしに実践できるのでしょうか。

つぎに、ニューヨーク市の大学に拠点をおく労働者教育プログラムで、私が行なった仕事をふり返つてみたいと思います。この作業によつて、いわゆる「労働者教育問題」に対する示唆

「」に述べられていることは一世紀以上も前のことです。現在のように、アメリカの大学の多くが労働研究プログラムを持つようになる前のことでした。実際、今日では、名門校を含む多くの大学で、「労働問題を解決するべく特別に計画された研究」を有するようになってきました。この点に関しては、組合組織化戦略と使用者の抵抗に関するケイト・ブロンンフェンブレンナートとロブ・ヒッキーの調査研究を参照ください。

（Tussey, 1972）

を得る「いじめ」が「いじめ」のよう。

2 IIIへの専門用語

民衆教育 (Popular Education)

本稿では、「民衆教育」へこう用語を、民主的かつ参加型で、あるいは、民主的な労働組合と団体行動へ発展させ、と同時に労働者の能力をも発展させるように設計された教育手法を意味するものとして使用します。(Burke, 2002 および拙文参照)

とせずに、人種や性別、国籍、労働者階級を形成するその他の社会的因素と関連して、この概念として使用します。ひとつを例にとれば、「労働」は常に人種によって決定づけられています。もっぱら白人労働者について話している時であっても、「労働問題」は本来的に人種問題であり、したがって、真っ先に人種問題となります。同様のこととは、ジョンソン、セクシャル・アイデンティティ、国籍などにも当てはまります。(Roediger, 1999)

3 労働者教育と成人教育

労働者教育 (Worker Education)

本稿は、労働研究 (labor studies) ではなく、労働者教育 (worker education) に焦点を当てています。後述するジエラード・S・マーフィー労働者教育・労働研究所 (Joseph S. Murphy Institute for Worker Education and Labor Studies : The Murphy Institute) にみられるように、実際には、労働研究と労働者教育はしばしば共存してしまいます。しかし、学術的な研究分野としての労働研究と労働者教育とは、一般的に異なります。(Schnee, 2007)

ニューヨーク市の労働者教育には、多様で幅広い教育プログラムがありますが、簡略化すると、つぎの四つの基本類型に大別できます。複数の労働者教育がひとつの講座で行なわれる」とか、よくあります。

- ・「マーシック・スキル」コース（通常は、第一言語・外国语としての英語、または高校レベルの講座）
- ・「ジョブ・スキル」コース（見習工講座や職業訓練講座など）

労働者教育を始めたとき、私は経済学の大学院生で、労働運動の急進的民主主義の目標を抱く学生・労働運動活動家でした。ニューヨーク市立大学にあるラガーディア (LaGuardia) ・コミニティ・カレッジの成人学習センター (Adult Learning Center) で、基礎教育と一般教育修了検定 (GED) 受験準備の非常勤講師になりました。アメリカでは、高校を卒業していない人は、主要な科目分野を含む標準試験を受けることで、GEDを取得することができます。高卒資格/GEDは、ほとんどの仕事で最低限必要とされる学間的な資格証明書で、初步的で労働者階級的な仕事でも必要とされます。GED受験準備コースに参加するためには必要な読み書きの能力が足りない学生は、基礎教育コースか識字コースへ振り分けられます。

学生は全員が労働者で、低所得者層や失業者がほとんどでした。多くはアメリカ生まれでしたが、おそらく三分の一は移民でした。彼らはみんなGEDの取得を、より良い仕事に就くための重要なステップと考えていました。中には少数ですが、大学レベルの研究へ進むために受講している人もいました。

名称は「成人学習センター (Adult Learning Center)」でしたが、これは労働者教育でした。

私はデブズの用語の「労働問題」を広い意味で使用します。つまり、労働問題を単に労働組合に関する問題としてではなく、また、労働 (labor) をある種的一般的な労働者を表す概念

労働者教育を始めたとき、私は経済学の大学

院生で、労働運動の急進的民主主義の目標を抱く学生・労働運動活動家でした。ニューヨーク市立大学にあるラガーディア (LaGuardia) ・コミニティ・カレッジの成人学習センター (Adult Learning Center) で、基礎教育と一般教育修了検定 (GED) 受験準備の非常勤講師になりました。アメリカでは、高校を卒業していない人は、主要な科目分野を含む標準試験を受けることで、GEDを取得することができます。高卒資格/GEDは、ほとんどの仕事で最低限必要とされる学間的な資格証明書で、初步的で労働者階級的な仕事でも必要とされます。GED受験準備コースに参加するためには必要な読み書きの能力が足りない学生は、基礎教育コースか識字コースへ振り分けられます。

学生は全員が労働者で、低所得者層や失業者がほとんどでした。多くはアメリカ生まれでしたが、おそらく三分の一は移民でした。彼らはみんなGEDの取得を、より良い仕事に就くための重要なステップと考えていました。中には少数ですが、大学レベルの研究へ進むために受講している人もいました。

名称は「成人学習センター (Adult Learning Center)」でしたが、これは労働者教育でした。

となる資格証明書を取得できるよう手助けしていました。時々議論があります。

大学では、初等教育を修了できなかつた成人を「成人学習者 (adult learners)」とみていました。成人学習センターの任務は、彼らの「スキル不足」を改善し、使用者の要求を満たせるようになることでした。ここで労働者たちに訴えかけたのは、労働条件と階級流動性を改善する手段としての、たいへん幅広い意味での教育イデオロギーでした（実際、アメリカの労働者全体としては、教育は、労働条件の改善や階級の流動性を実現するよりも、社会の階層化を再度もたらしているようです）。（Schnee, 2007）

ときに、教授職は本当に労働者なのかという議論がありますが、ラガーディア・コミュニティ・カレッジの成人学習センターでは、そうした議論はありませんでした。教職員は大学の雇用範囲の最下層で働いていました。私たちの多くは雇用保障や福利厚生のない非正規労働者でした。正規雇用のニューヨーク市立大学教員とは異なり、私たちの使用者は研究基金 (Research Foundation) によって、大学内でも特殊な組合未組織の民間部局でした。「成人」とみなされたも労働者とはみなされない私たちの学生と妙に似ていて、署名した雇用契約書は、「非教育職員」と定義していました。

貧困者向け社会サービスの一形態としての教育という考え方、使用者の要求を満たすような労働者を育てるという任務、教育を通じた流动

性といらいデオロギー、そして、教員の雇用の不安定性、これらはすべて、デブズが描いてみせた解放教育にとってたいへんな障害となります。同様の状況は、もつとも「労働者教育」らしいと言われるプログラムにおいても、広く見受けられます。私自身、旧全米婦人服労働組合 (International Ladies Garment Workers Union: ILGWU) の労働者・家族教育プログラム (Worker-Family Education Program) の仕事をために成人学習センターを去る以前、そのことを知りました。

4 労働者・家族教育プログラム

熱烈な社会主義者やフェミニニア・コーン (Fannia Cohn) のようなフェミニストは、190世紀初期に労働者家族教育プログラム (Worker Family Education Program) を設立しました。このプログラムは、アメリカにおける労働者教育の豊かな歴史の一端をなしています (Orleck, 1995)。しかし、一九九〇年代初期に、私が雇われるころまでには、設立当初の熱気はすっかり消え去っていました。

ILGWUは衰退期にあり、組織化の失敗や協約の弱い規制力、腐敗した経営との関係について特徴づけられていきました。そして、結局は、全米合同被服織維労働組合 (Amalgamated Clothing and Textile Workers: ACTWU) とともにその後は全米ホテル・レストラン従業員組

合 (Hotel and Restaurant Employees International Union: HERE) と合併しました。私のクラスを受講する労働者は、ラテンアメリカやアジア、東ヨーロッパから来た新しい移民でした。彼らに労働条件を尋ねると、劣悪な作業所で搾取されており、しばしば、火災避難口の施錠、賃金不払い、児童労働、健康保険の資格を満たす労働時間を得るために経営者に賄賂を払わせられる、といったことを含む違法な労働条件について語りました。彼らは組合代表を疑つており、使用者と結託して、「厄介者」(troublemakers) を好まない組合の交渉委員たち (business agents) のことを話しました。これらの多くの労働者にとって、英語が、劣悪な作業所（およびILGWU）から脱出して、よりよい仕事に就くための手段でした。

組合役員にとって教育は、健康保険や組合クレジットカードと同じような組合員向けのサービスでした。たまに、組合の組織化部門が来て、突然「囚われの聴衆」会議を開催します。クラスは予告なしに休講となり、学生たちは組合スタッフが実施する特別キャンペーンについての話を聞くために集められていました。

労働者家族教育プログラムの責任者は、もつと教育を行ないたいと考え、より活動家志向の強い民衆教育手法を取り入れるために、常勤教員を新たに中核グループとして雇い入れました。私もその一員でした。私たち七人の常勤教員からなる中核グループは民衆教育を研究し、どう

すればプログラムを民衆教育的な手法に変えていけるか考えました。私たちが最初に直面した問題は、同僚からの抵抗でした。同僚の大多数は、日中は公立学校の常勤教員をやり、夜はわずかな小遣い稼ぎのために労働者家族教育プログラムで教えていました。彼らは長年の経験があり、新たな手法は自分たちの参加なしに上から課せられたものと感じていました。同僚の教員たちに指導方法を強制的に変えさせようとするのにに対して私たちが拒否したので、私たち教員グループと労働者家族教育プログラムの管理者たちの間に軋轢ができてしまいました。私たちが教職員組合を組織すると、その軋轢はさらに深まりました。

私が働き始めて間もなく、労働者家族教育プログラムは労働者教育協会 (Consortium for Worker Education : CWE) の一部となりました。CWEは大きな非営利教育団体で、ニューヨーク市内の二〇以上の労働組合から資金援助を受け、ニューヨーク州政府から補助金の多くを受け取っています。CWEは、解雇された労働者のためのコンピューター訓練から、移民向け英語講座、ホテル労働者の職業訓練まで、幅広いプログラムを運営していました。私がILGWUや、後に全米サービス従業員労働組合一一九九 (Service Employees International Union 1199 : SEIU) や全米事務専門職従業員組合 (Office and Professional Employees International Union : OPEIU) のような他の組合で教えていた第一回

語としての英語コース (ESL) とその他のコースは、すべてCWEに含まれていました。

組合の組織化は、労働者教育を社会変革に関連づけ、必要な条件を実現するために、重要なステップでした。私たちは労働運動の実践によつて、労働運動を学んだだけではなく（労働者を教育する者にとって重要）、私たちが説いてきたものを実践するべく、教育と組織化を結び付けるチャンスも得ました。教員たちも、学問の自由の条項を含む権利保障や雇用保障のある地位を得ました。教員たちの組織はCWEの任務に挑戦していくための基礎となりました。

5 状況は危機的である

労働者家族教育プログラムとCWEは、「成人教育」プログラムの多くを共有していましたが、決定的な違いがありました。前者のプログラムは、組合が後援しており、学生には単なる成人ではなく、労働者たる者や組合員たる者を募集していました。これは実際、一つか二つの職場から来た人々、すなわち、条件と利害を通じる人々で埋め尽くされた教室で働くことを意味していました。民衆教育手法に関心を持つ労働教育者にとって、この出発点はきわめて重要です。というのも、労働者家族教育プログラムは、共通問題についての対話を可能にする条件や、共通問題の解決を促進するために活用できる団体行動を生み出すものだからです。野

語としての英語コース (ESL) とその他のコースは、すべてCWEに含まれていました。

組合の組織化は、労働者教育を社会変革に関連づけ、必要な条件を実現するために、重要なステップでした。私たちは労働運動の実践によつて、労働運動を学んだだけではなく（労働者を教育する者にとって重要）、私たちが説いてきたものを実践するべく、教育と組織化を結び付けるチャンスも得ました。教員たちも、学問の自由の条項を含む権利保障や雇用保障のある地位を得ました。教員たちの組織はCWEの任務に挑戦していくための基礎となりました。

球にたとえていえば、私たちは一墨ベースに立っている状態でした。成人学習センターでは、私は球場にさえ到着しておらず、駐車場にも行き着いていなかつたのかもしれません。

しかしその状況はリスクをともなつてもいました。「お話」は、多くの組合で受け入れられるかもしれませんし、労働者家族教育プログラムでそうだつたように、民衆教育で得た授業の手法も大目にみられ、推進されることさえあるかもしれません。しかし、実践する民衆教育が、思考段階から実行段階へ移るとなると話が違ってきます。すなわち、自分が教えていた第二言語としての英語 (ESL) クラスの在宅介護労働者が、酷い労働条件と自分たちの組合代表の貧弱さに対する不満から、使用者に異議を唱え、自分たちの組合に圧力をかけるために、一般組合員委員会——Trabajadores/as Unidos (団結労働者)——を組織化するに至ったとき、CWEにおける私の仕事は突然終わりを迎えたのです。

組合の委員長は私をそのリーダーだと疑つて、解雇しました。CWEの経営は、市や州からの資金を得るために、組合や組合の政治的影響力に頼っていたので、応じるほかありませんでした（私は在宅介護労働者のリーダーではありませんでしたが、コミュニティを活動拠点として組織化を推進している移民労働者組織であるラテン系労働者センター (Latino Workers Center) との接触を取り計らう）と、彼らを支援して

いました)。

成功する民衆教育——デブズが仕掛けたような、労働者が「自分たちで決心」し始める教育は、組合執行部にはば間違なく脅威とみなされます。執行部はそれを阻止するために断固とした行動を取るでしょう。

私は自分の訴訟事件が続いている間、ラテン系労働者センターで教員や教員トレーナーとしてボランティアをしたり、第二言語としての英語（E S L）クラスの立ち上げや、オルグのためのスタッフ育成ワークショップを手伝つていきました。ラテン系労働者センターはコミュニティを活動拠点とする、独立した非営利の移民労働者組織でした（現在はなくなりました）。私が勤務したことのある、大学に拠点をおき、組合が後援するプログラムとは異なり、ラテン系労働者センターでの目標は、運動を起こすために民衆教育を用いることでした。本稿のテーマは大学における労働者教育ですので、ここでの経験にはこれ以上触れませんが、その経験は「労働問題の解決」に対して、積極的に貢献する労働者教育を実践するために必要な条件とは何かという課題を解くことに役立ちました。

私は失業手当を使い切つたので、成人学習センターとバンク・ストリート教育大学（Bank Street College of Education）によって運営されている家族識字プログラムでの仕事を見つけて、掛け持ちのパートタイム労働者に戻りました。労働者教育の潜在的パワーを知つてしまつた後

に「成人教育」に戻るのは厳しいものがあります。そこで、巨大な建設労働組合である全米電気工組合（International Brotherhood of Electrical Workers : IBEW）ローカル三の組合員向けの見習工養成「労使」共同プログラム（Joint Apprenticeship Training Program : JATP）で教えるところへ求人がエンパイア・ステート・カレッジ（Empire State College）で出ていることを知ったとき、そのプログラムについてはほとんど知りませんでしたが、すぐに応募しました。

見習工養成共同プログラムは、ニューヨーク州立大学に一三あるカレッジのうちのひとつ、エンパイア・ステート・カレッジのハリー・ヴァン・アースデール・ジュニア（Harry Van Arsdale Jr.）労働研究センターにあります。エンパイア・ステート・カレッジはニューヨーク州に三五カ所、海外に数カ所、そしてオンラインの遠距離学習プログラムを持つ大きな組織です。エンパイア・ステート・カレッジは「成人のためのカレッジ」として一九七三年に創立され、準学士、学士、修士の学位を授与していました。

私は「アメリカ労働史」と「労働と法律」の夜間コースを、朝六時か七時から働いている労働者たちに教えていました。授業は典型的な古いニューヨーク市立高校であるチャーチル・職業高校（Chelsea Vocational High School）で開かれています。典型的な見習い工は、二〇代で、アメリカ生まれ、高卒の白人男性で、しばしば同じ職業や組合に入っている親族（通常は父親

るようにするというハリー・ヴァン・アースデール・ジュニアの運動は、エンパイア・ステート・カレッジと労働研究センターの設立という形で実を結びました。さらに彼は、見習工養成共同プログラムを管理する電気産業労使共同委員会（Labor-Management Joint Industry Board of the Electrical Industry）の設立も支援しました。

IBEWの見習い工は、有資格の電気工となり、正規の組合員になるべく、仕事に就いて、求められる技術訓練をこなし、労働研究で科学の準学士を取得します（学士課程が通常四年かかるのに対し、準学士は大学で二年間の履修を必要とします）。プログラムのパンフレットにあるように、当該プログラムの学科構成は通常と異なります。「学生は労働史や産業および社会全体における組合の役割、経済学、労働力構成の変遷、労働安全衛生の課題を研究します。また、書き方講座やコンピューター技能講座を受講する」とことで、自分の考えを文章で表現することを学んだり、コンピューターラーを使いこなせるようになります。」

私は「アメリカ労働史」と「労働と法律」の夜間コースを、朝六時か七時から働いている労働者たちに教えていました。授業は典型的な古いニューヨーク市立高校であるチャーチル・職業高校（Chelsea Vocational High School）で開かれています。典型的な見習い工は、二〇代で、アメリカ生まれ、高卒の白人男性で、しばしば同じ職業や組合に入っている親族（通常は父親

か伯父（叔父）をもつっていました。その後、訴訟と何年もの闘いを経て、見習工プログラムは女性と有色人種の募集に努め、学生層は多様になりました。

建設業における電気工はブルーカラーにしては給料がよく、十分な福利厚生と雇用保障がありました。学生の中には、二つ目の年金と先任権による相対的高賃金を確保することを望んで、すでに警察官やゴミ収集労働者の仕事に就きながらも、第二のキャリアとして見習工プログラムを始める者もいました。

教員のほとんどは白人男性で、私のようにパートタイムで、アメリカ大学教授連合（American Association of University Professors）の組合員でした。しかし、繰り返しますが、雇用保障その他の福利厚生を受ける資格はありませんでした。

見習工たちは仕事を終えてから登校するので疲れており、学校に、とくに典型的な古いニューヨーク市立高校に舞い戻って居ることに、興味がありませんでした。彼らの学生としての動機は、純粹に実用的なもの、つまり、見習工プログラムが要求するからでした。もし、労働者たちが出席しなくなったり、あるいは必須課程を落とした場合、JATP委員会の懲戒聴聞に呼ばれて、見習工プログラムから退学させられるかもしれませんでした。電気理論のクラスは、彼らの仕事とある程度明らかな関係がありまし

たが、労働史はどうでしょうか。

6 組合の規律、職務の規律、および紳士の「C」

私の戦略は、労働者たちに自分の見習工経験を、アメリカ労働史上の異なる時期における労働者たちの経験と結び付けることによって、仕事と生活について、意味のある対話をさせようというものであり、プログラムの傾向に反していました。プログラムの全体的な構想は、労働者が定刻に来て、必須の要件を満たすことで、規律を実践するべきであり、それでこそ一人前の職人になれるというものでした。私たち教員は、授業の中で自分たちのしたいことをなんでもできましたが、私たちに割り当てられた仕事は授業を担当し、学生に多く求めすぎてはならないということでした。授業は労働者の参加が増えること、または組織化することと関連があるかも知れないという考えは、話に出ませんでした。成績評価の時期が来ると、管理部門からの助言は「彼らがはじめて出席し、授業を混乱させたりしなければ、『紳士の「C』』『態度に免じて合格点』をあげて」というものでした。

しかし、私が気づいたのは、多くの学生は労働史に興味を持ったり、私が使った参加型の手法を楽しんだりしているということでした。彼らが書いたものは（私は頻繁に小論文を書かせました）、しばしば深く考えられ、誠実なもので

した。組合について話すときには、忠実でないとは思われたくない、というある種の自己検閲意識が働くにもかかわらず、産業や組合について学んでいるということをみんなと喜んで共有していました。それはまるでシーシュボスの徒勞でした。「シーシュボスはギリシャ神話の登場人物。罰として、巨大な岩を山頂まで押し上げることを課せられるが、いま少しの所で岩が転がり落ちてしまう。この苦行を永遠に繰り返すことから「Sisyphean labor」は「徒労」を意味する——訳者。私は民衆教育にてつもなく大きな潜在能力を見て取ることができましたが、それを展開させることは、私の能力の範囲を超えていました。組合の組織的状況と政治的文化がそれを叶わぬものにしていましたのです。

ちょうどそのときに、私は組合民主主義協会（Association for Union Democracy : AUD）に採用されました。AUDは労働者が組合員としての民主的権利を守ることを手助けしている小規模な非営利組織です。私に割り当てられた仕事は教育プログラムを立ち上げ、AUDのウェブサイトを再構築することでした。AUDで、ついに私は民衆教育を本当に実践することとなり、「組合民主主義労働者教育（Union Democracy Worker Education）」というプロジェクトを始めました。AUDの組織としての特別な役割は、労働者が自ら運動を作り出すように助け促すことであつて、彼らを上から指導しようとするとものではなかつたため、組織化のツールとして労

労働者教育が有する矛盾から私は解放されました。しかし、この話は大学が主催する労働者教育の領域外のことです。またしても話がそれました。（拙文“*The Workers Inspiration*”参照）

I BEW見習工プログラムで二年間働いた後に、私の契約は更新されませんでした。その理由は、私の組合民主主義協会での仕事か、組合民主主義に関する教材の使用か、あるいは「労働と法律」コースにおける改革のせいなのかわかりません。しかし、かりにそうだったとして幸運にもI BEW見習工プログラムを離れた直後、マンハッタンにあるクイーンズ・カレッジ労働者教育公開センター（Queens College Worker Education Extension Center）や、労働研究と経済学のコースを教える非常勤講師に採用されました。クイーンズ・カレッジはニューヨーク市立大学のエリート向け四年制大学のひとつです。当時、労働者教育公開センターは、クイーンズ・カレッジのジョーセフ・S・マーフィー労働者教育・労働研究所にありました。マーフィー研究所は学術雑誌である『ザ・ニューリバイ・フォーラム（The New Labor Forum）』を出版したり、カレッジの学生がニューヨーク市にいくつかある組合のスタッフとして一学期を勉強しながら働く「組合学期（Union Semester）」プログラムを提供しています。

ニューヨーク市立大学の他のカレッジ、とりわけシティ・カレッジ（City College）は、労

働者教育センターを運営して労働者教育を提供していますし、ブルックリン・カレッジ（Brooklyn College）には労働者教育大学院センター（Graduate Center for Worker Education）があります。しかし、最近、マーフィー研究所は「大学全体のセンターとなり、ニューヨーク市立大学の一一大学の学術講座、一九のキャンパス、および多様な教育資源への労働者用の入口」となってきました。労働者教育センターも発展を遂げ、いまや、ニューヨーク市立大学の大学院と大学センターにおける職業研究学部（School of Professional Studies）の一部となり、教員や機械運転士、運輸労働組合を含むいくつのかの異なる組合の組合員のために講座を開いています。

労働者教育公開センターと一緒に勉強した学生たちは、ニューヨーク市役所の公務員であり、公共部門の二大組合である全米通信労働組合（Communications Workers of America：CWA）のローカル一一八一八・メリカ州郡自治体従業員連合（American Federation of State, County, and Municipal Employees：AFSCME）の三七地区評議会の組合員でした。典型的な学生は、子供のいる中年のアフリカ系アメリカ人女性であり、フルタイムの仕事を終えてから授業に来ています。（Schnee, 2007）

労働者たちは様々な理由でそのセンターに来ており、当初は明確な目標を持つていなかったりもよくありました。主な動機は、市役所でより多くの同僚と同じように、私は非常勤講師でした。私は専門職員会議（Professional Staff Congress）の一員でしたが、やはり雇用保障や勤務時間不足で福利厚生がありませんでした。そのセンターは主に、労働運動の改革者たちに左翼的労働文化と資源を維持するために重要な場所を——そのほとんどは活動家でもある教員たちに仕事を与えることを通して、また、小さな図書館を通じても、労働党のような組織に集会所を貸すことを通しても——提供していました。

公開センターは、人種や階級、ジェンダー、出身国、宗教、政治的イデオロギーの原動力が重なり合い、教育を行なうのに魅力的な環境でした。ハリー・ヴァン・アースデール・ジュニア労働研究センターとは異なり、公開センターの教員および管理者たちは、教育を厳しく、かつ学生の関心とニーズに合ったものにする」とに焦点を当てていました。教員は、自分たちの仕事を反省し、新任教員を育成する教材開発を

高い地位に昇進するには、学士の学位を求められることが多いという現実でした。プログラムのスケジュールや内容は労働者向けに設計されいましたし、組合は授業料の大部分を組合員に払い戻していたので、何年も経つてから学校へ戻ってくる労働者たちにとって、魅力的な選択肢となっていました。私が教えたコースはすべて「執筆力強化」コースで、学生の技能向上に焦点を当てていました。

ほとんどの同僚と同じように、私は非常勤講師でした。私は専門職員会議（Professional Staff Congress）の一員でしたが、やはり雇用保障や勤務時間不足で福利厚生がありませんでした。そのセンターは主に、労働運動の改革者たちに左翼的労働文化と資源を維持するために重要な場所を——そのほとんどは活動家でもある教員たちに仕事を与えることを通して、また、小さな図書館を通じても、労働党のような組織に集会所を貸すことを通しても——提供していました。

行なうために、有給の職員研修時間を持つていました。教職員の多くは、労働運動やコミュニティ運動、環境運動の活動家であり、プログラムでは社会問題を扱う教育の場を提供していました。

教員や学生は、プログラムに協賛した組合との相互関係を最小限にしており、組合役員と会うのは卒業式か、組合役員が講義を行なうときだけでした。私の経験からいえば、組合のスタッフや役員がプログラムを組織化に結び付けたり、労働者参加の促進に用いることはほとんどありませんでした。職場委員をしていた学生の中には、受講生仲間を組合活動へ誘うためにクラスを使う人もいましたが、大概はそうではありませんでした。簡単にいえば、公開センターで優先されるのは、労働者たちを学業で成功させることでした。そのようななかで、多くの教職員は、職場や社会問題について学生との対話を発展させようと模索していましたが、これは個人の努力の問題でした。プログラムの管理者が彼らを雇い勇気ついているというレベルでは、このプログラムは、教育を「労働問題」の解決へと結びつける支援をしていると言えます。しかし、これは当プログラムの明白な目標ではありませんし、組織的な努力でもありませんでした。

一番良いのは、学生と教員が様々な戦略や関心、文化、イデオロギーを共有し、労働者教育にとってどのような任務が可能かを探究しえる

安全な場を、センターが提供するといった。公開センターにおける労働者教育の任務が明確に定義されていなかったため、多くの学生に欲求不満や目標喪失感を生み、学生と教員は自分たちにもっと関係の深い組織（主に教会、コミュニティ組織、家族）や活動の方向性を見つけたことで、空虚感を埋めています。組織化に向けてこれまで為された偉業や驚くべき潜在能力といったものすべてに対し、労働者教育は学術的追究とキャリア向上の夢の境界内にどらまつっていました。労働問題は続き、未解決のままでした。

7 結びにかえり

大学を拠点とし、組合が後援している労働者教育プログラムは、民衆教育にてつもなく大きな機会をもたらしました。しかし、これらのプログラムを形作っている制度的、イデオロギー的、そして個人的制約が結びついて、民衆教育の実践を不可能にするわけではなくものの、やりにくくなっています。これらの制約がないところ、たとえば、労働者センターや組合民主主義協会のような独立系組織では、労働者教育プログラムはアメリカの労働運動を再生するのにたいへん役立っています。しかしながら、大学を拠点とし、組合が後援している労働者教育プログラムは、労働者との対話や調査を行なう重要な場所であることに変わりありません。そこ

では、労働者教育に存在する制約を見つけ、立ち向かうことができるのです。

訳者付記

翻訳にあたって、高須裕彦氏、小坂井環氏から多大なるご助言とご助力を得た。ここに記して、心からの謝意を表したい。なお、訳文の誤りはすべて訳者の責に帰する。

【参考文献】

- *Kate Bronfenbrenner and Rob Hickey, *Blueprint for Change: A National Assessment of Winning Union Organizing Strategies* (Ithaca, N.Y.: Cornell Office of Labor Education Research, 2003).
- *Beverly Burke, Jo Jo Geronimo et al, *Education for Changing Unions* (Toronto, Canada: Between the Lines, 2002)
- *JATP (Joint Apprenticeship and Training Program) (http://www.esc.edu/ESConline/ESC_Locations/labor.nsf/wholeshortlinks/2/IBEW+Associate+Degree?opendocument)
- *Matt Noyes, *The Workers Inspiration: Popular Education for Union Democracy*. (www.rerollingearth.org)
- *Amelie Orleck, *Common Sense and a Little Fire* (North Carolina: University of North Carolina Press, 1995.)

* David Roediger, *The Wages of Whiteness : Race and the Making of the American Working Class.*

(Rev. ed. London and New York : Verso Books, 1999).
Emily Schnee, *Tetering at the Fulcrum : Possibilities and Constraints in a College Worker Education Program.* (unpublished PhD Dissertation Graduate Faculty in Urban Education, City University of New York, 2007)

org/Education/edhome.htm
(Matt Noyes)
(こっかわ・マット)

労働教育プログラムのカントキヤム

* Adult Learning Center, LaGuardia Community College

(CUNY)

<http://acc.laguardia.edu/alc/>

* The Center for Worker Education at The Joseph Murphy Institute for Worker Education and Labor Studies(CUNY) <http://www.workered.org/Home/Centers/CenterforWorkerEducation/tabid/106/Default.aspx>

* Center for Worker Education, City College (CUNY)

<http://www1.ccny.cuny.edu/prospective/cwe/>

* Consortium for Worker Education

<http://www.cwe.org/>

* Graduate Center for Worker Education, Brooklyn College (CUNY)

<http://workered.brooklyn.cuny.edu/>

* Union Democracy Worker Education Program, Association for Union Democracy <http://uniondemocracy.org/>



成果主義時代の ワーカールール

道幸哲也 著

[北海道大学教授] 定価(本体1800円+税)

過酷な競争、サービス残業、賃金の低下、
ストレス・過労死……。“ルール無視”が
蔓延する時代にあって、人間らしく、自分
らしく働くための労働法の知識を提供。

- 第1章 まず、労働法を知る
第2章 自分らしく働く
第3章 プライバシーを守る
第4章 権利を主張する
第5章 労働条件を維持・確保する
第6章 働き続ける
(主な回次)

旬報社 〒112-0015 東京都文京区自白台2丁目14番13号
TEL 03-3943-9911 FAX 03-3943-8396

E-Mail
info@junposha.co.jp